

ホイットマンの親戚

—— スウェーデンボリ、コンウェイ、ブレイク*

鈴木 雅 之

ロンドンの 1868 年は、ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman 1819-1892) とウィリアム・ブレイク (William Blake 1757-1825) が異常接近した年である。ラファエロ前派のひとり W. M. ロセッティ (William Michael Rossetti 1829-1919) 編『ホイットマン撰集』(*Poems by Walt Whitman*) が、ロンドンの出版社主ジョン・カムデン・ホッテン (John Camden Hotten) から出版されたのが 1868 年。詩人 A. C. スウィンバーン (A. C. Swinburne 1837-1909) 著『ウィリアム・ブレイク —— 批評的エッセイ』(*William Blake, A Critical Essay*) が『ホイットマン撰集』と同じ出版社から出たのも 1868 年。さらにモンキュア・コンウェイ (Moncure Conway 1832-1907; 図 1) によるスウィンバーンのブレイク論書評「評論」(“Critical Notices”) が、「フォートナイトリー・レビュー」(*The Fortnightly Review* [1865 創刊]) 誌に掲載されたのも 1868 年のことだった¹。

* 本稿は、第 80 回日本英文学会 (2008 年 5 月 25 日、広島大学) におけるシンポジウム「ホイットマンの親戚」での発表原稿を基にしている。『第 80 回大会 Proceedings』(日本英文学会編、2008) 所収のシンポジウム要約「ホイットマンの親戚 —— 大西洋にかける橋」167-169 頁と一部重複する。

以下の論考において、英国におけるホイットマン受容の特徴が如何なるものであったかを、ロセッティ編『ホイットマン撰集』出版に関与した人物を中心に考察する²。本稿で取り上げるのは、ロセッティのほかには詩人スウィンバーンとコンウェイである。とくにコンウェイは、アメリカ（ホイットマン）と英国（ブレイク）を結ぶ架け橋的な働きをした人物であった。ロセッティ、スウィンバーンそしてコンウェイの3人が、期せずして1868年にブレイクを英国側におけるホイットマンの「親戚」と見立てた理由とその根拠を探り、そこからふたりの詩人の「親戚度」を以下において測ってみたいと思う。ブレイクとホイットマンは、これまで欧米のみならずわが国においても「親戚」同様の扱いをされてきたが（図2）、しかしながらその根拠は何かという点になると、いまだまとまった論考が出ていないように思われる³。

1 William Michael Rossetti, ed., *Poems by Walt Whitman* (London: John Camden Hotten, 1868; A New Ed. London: Chatto and Windus, 1901); Algernon Charles Swinburne, *William Blake: A Critical Essay* (1868), ed. with an introduction by Hugh J. Luke (U of Nebraska P, 1970); Moncure Conway, "Critical Notices," *The Fortnightly Review*. III (new ser. February 1868): 216-220.

2 *Poems by Walt Whitman* の周辺には、Blakeに関わりのある人物が不思議と多い。たとえば、Rossetti自身も関与したBlake伝 *The Life of William Blake*, 2 vols. (1863) の作者 Alexander Gilchrist の妻 Anne Gilchrist、娘の Grace Gilchrist など。前者には "A Woman's Estimate of Walt Whitman" (*The Radical* [May 1870]: 345-359) という熱烈な Whitman 賛美の文章があり、後者にも "Chats with Walt Whitman" (*Temple Bar* 113 [February 1898]: 200-212) という、Whitman の近くに滞在しての印象記が残されている。

3 英国における Whitman 受容を論じたものとしては、Harold Blodgett, *Walt Whitman in England* (Ithaca: Cornell UP, 1934) がいまだにその価値を失っていない。ただ Blodgett が扱うのは、*Poems by Walt Whitman* 出版以降のこと (W. M. Rossetti, Edward Dowden, John Addington Symonds, Tennyson など) であり、Blake は取り上げられていない。本稿では、Blake と Whitman を結ぶ「大西洋にかける



図1 Moncure Conway (1832-1907)
Debenham & Gabell.

Conway はヴァージニア州スタッフォード郡の生まれ。父親は奴隷を所有する農園主にして事務弁護士。Conway は、ハーヴァード大学神学部にはいりユニテリアンの牧師を目指す。そこで知り合った Emerson (1803-82) からは大きな影響をうける。やがて奴隷制度廃止論者となり、ヴァージニア州が奴隷制度を肯定していることを非難する。1854 年にユニテリアン牧師として説教壇に立つも、反奴隷制度の説教をしたために解雇。アメリカを逃れて英国にわたり、ロンドンの South Place Chapel 付牧師として評判となる。South Place Chapel での最初の説教は 1863 年 5 月 6 日のことであった。この教会堂は信教の自由を説くことで有名であり、水を得た魚のように過激な説教で評判になったという。Rossetti と Whitman の間をとりもち *Poems by Walt Whitman* 出版に貢献した。



図2 『ブレイクとホイットマン』(全2巻)

東京：同文館。1931[昭和6]年-1932[昭和7]年。柳宗悦と寿岳文章は京都でこの雑誌の刊行を始めた。柳がホイットマン、寿岳がブレイクの編集を担当。木版の表紙デザインは柳、その彫版は黒田辰秋、紙はオランダの手漉紙などを手本に寿岳が越前で特別漉かせた紙を用いた。製本は寿岳夫妻を中心に手縫じで行われた。

1. 1868 年ロンドン

ロセッティ編『ホイットマン撰集』(1868)

『ホイットマン撰集』は、ロセッティ自身による「序文」(“Prefatory Notice”)と『草の葉』初版(*Leaves of Grass*, 1855)に付された「序文」(“Preface”)、そしてホイットマン詩群から成る。ホイットマン詩は、1867 年刊『草の葉』第 4 版に基づくが、「デモクラットの歌」(“Chants Democratic”)、「ドラム・タップ」(“Drum Taps”)、「ウォルト・ホイットマン」(“Walt Whitman”)、「草の葉」(“Leaves of Grass”)、「別れの歌」(“Songs of Parting”)と分類・配列されている⁴。

「序文」のなかでロセッティは、英国側のホイットマン悪評に触れつつも⁵、ホイットマン詩の特徴は、「主題と理解の幅広さ、詩人が見つめ表現する対象への没入の激しさ」であると言う。人間を観察するときもホイットマンは、彼らをまるで「木々が歩いている(“as trees walking”)かのように」見つめている⁶。ホイットマンが見ている光景は、「幽霊のような実体のないものであり、

「橋」(Transatlantic Contacts)のひとりとして Conway に着目するが、日本とアメリカを結ぶ橋いわば「太平洋にかけの橋」(Transpacific Contacts)となった人物としては、雑誌『ブレイクとホキットマン』(1931[昭和6]-32[昭和7]図2)を刊行した柳宗悦と寿岳文章がいる。

4 ただし、*Leaves of Grass* (1855) “Preface”に見られる不適切と判断された箇所や言葉は削除された。

5 Rossetti は、“Prefatory Notice” (12)のなかで、Whitman の人柄を知るには Conway が 1866 年に発表したエッセイ “Walt Whitman” (*The Fortnightly Review*, vol. xxxv [15 October 1866]) を見よと書いている。

6 “Prefatory Notice” 7. これは一見奇妙な表現だが、後述するように、Rossetti による Swedenborg 的解釈と理解すれば納得できるだろう。というのも、Swedenborg によれば「木」は「真理」の表象である。James Hindmarsh, *A New Dictionary of Correspondences, Representations, & c. or the Spiritual Significations of Words*, ↗

それは下に隠れたもっと大きくてもっと深遠な実相の仮面にすぎない。目の前の光景はその実相の絶え間ない告示 (intimations) でありまえばれ (auguries) ののだ」とロセッティは言う⁷。「告示」や「まえばれ」という言葉は、直ちにわれわれにワーズワスやブレイクを想起させ、ロセッティのホイットマン理解の背後にはブレイクらが潜んでいるのではないかと思わせる。

次にロセッティは、ホイットマン詩の本質には、スウェーデンの哲学者・科学者・神秘思想家エマニュエル・スウェーデンボリ (Emanuel Swedenborg 1688-1772; 図3) の「特異で印象深い直感あるいは啓示が見られる」と鋭く指摘する⁸。

There is a singular and impressive intuition or revelation of Swedenborg's: that the

↘ *Sentences, & c. as Used in the Sacred Scriptures* (London: 1794); *The Swedenborg Concordance: A Complete Work of Reference to the Theological Writing of Emanuel Swedenborg*, ed. Rev. John Faulke Potts, 6 vols. (London: Swedenborg Society, 1888) を参照。

7 “Prefatory Notice” 7. 言うまでもなく “intimation” は William Wordsworth の傑作 “Ode: Intimations Of Immortality From Recollections Of Early Childhood” を、“auguries” は Blake の “Auguries of Innocence” を直ちに連想させる。Whitman は字義性 (literality) の詩人だという Rossetti の表現にも Blake の存在を感じてしまう。W. B. Yeats が Blake の特徴を “a too literal realist of imagination” (“William Blake and his Illustrations to *The Divine Comedy*”, *Essays* [New York: 1924]147) と指摘したことを想起しよう。

8 Blake と Swedenborg については、注 42 の他に、Harvey F. Bellin and Darrell Ruhl, eds., *Blake and Swedenborg: Opposition is True Friendship* (New York: Swedenborg Foundation, 1985) 参照。Whitman と Swedenborg については、Anders Hallengren, “A Hermeneutic Key to the title *Leaves of Grass*”, in *In Search of the Absolute: Essays on Swedenborg and Literature*, ed. Stephen McNeilly (London: Swedenborg Society, 2004) 45-59; Arthur Versluis, *The Esoteric Origins of the American Renaissance* (Oxford: Oxford UP, 2001) 156-170 他。最近の Swedenborg 伝としては、Lars Bergquist, *Swedenborg's Secret: A Biography* (London: Swedenborg Society, 2006)。

whole of heaven is in the form of one man, and the separate societies of heaven in the forms of the several parts of man. In a large sense, the general drift of Whitman's writings, even down to the passages which read as most bluntly physical, bear a striking correspondence or analogy to this dogma. He takes man, and every organism and faculty of man, as the unit — the datum — from which all that we know, discern, and speculate, of abstract and supersensual, as well as of concrete and sensual, has to be computed.⁹

上記引用の前半は、ほとんどスウェーデンボリの主著『天国と地獄』(*Heaven and Hell*)の要約と言ってよい¹⁰。「天国全体はひとりの人間の姿」をしているとは、おそらくスウェーデンボリの「巨人」(“Grand Man”)理論への言及だろうし、「照応」(“correspondence”)という言葉は、「照応」理論というこれもまたスウェーデンボリ思想の中核を占める教義を念頭に置いてのことだろう。「巨人」と「照応」は、後述するように、ホイットマンとブレイクの「親戚」関係を考察する上でも非常に重要な鍵語であり、「スウェーデンボリ値」によって双方の「親戚度」を計るときにいわば計測器のようなものでもある。『ホイットマン撰集』には、カーライル(Thomas Carlyle 1795-1881)などと並んで、スウェーデンボリからの一節、恐らく『天国と地獄』の一節が、エビグラフとしても掲げられていたことを想起しておこう。当時ロセッティがスウェーデンボリに夢中になっていた様子は、画家スコット宛て書簡(1857年12月5日付)にも明らかだ¹¹。

9 “Prefatory Notice” 8.

10 Emanuel Swedenborg, *A Treatise concerning Heaven and Hell, and of the Wonderful Things therein as Heard and Seen by the Hon. Emanuel Swedenborg*, tr. Thomas Hartley (3rd ed.; London: 1789) Nos. 89-90.

11 Rossetti は、“I have been reading also, with great delight and wonder, Swedenborg's *Heaven and Hell*, which I am sure is full of profoundest spiritual truths, — perhaps real bona fide ‘revelation’”と書いている。“To William Bell Scott, 5 December 1857”, in *Selected Letters of William Michael Rossetti*, ed. Roger W. Peattie (University Park and ↗

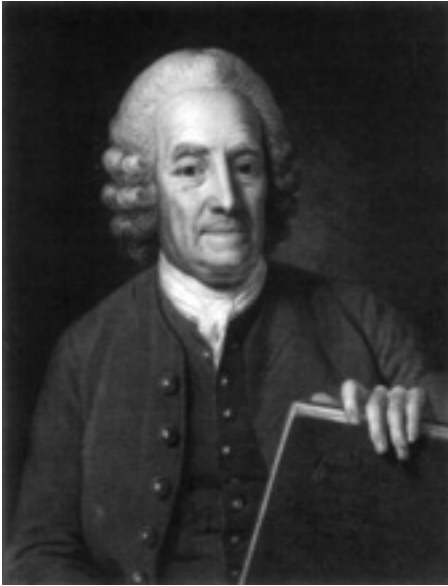


図3 Emanuel Swedenborg (1688–1772)
制作年代等不詳。

Apocalypse Revelata (1766) を手にした Swedenborg の肖像。スウェーデン生まれの鉱山技師であったが当時のヨーロッパ最大の哲学者、科学者、神秘主義思想家となる。彼が精通した学問領域は、数学、物理学、天文学、宇宙科学、鉱物学、解剖学、生理学等々。天界の秘儀や死と死後の世界について語り、真のキリスト教とは何かを説き、「創世記」を読み直し、神、宇宙、人間について夥しい数の神学著作を著した Swedenborg の影響は、Blake, Flaxman, Coleridge から Balzac, Baudelaire, Emerson, Yeats, Jung, Henry James Sr 等に至る。松岡正剛(『遊学 I』)あるいは大江健三郎(『人生の親戚』)も参照。

スウィンバーン『ウィリアム・ブレイク — 批評的エッセイ』(1868)

『ホイットマン撰集』の編者ロセッティに捧げられたスウィンバーンのブレイク論は、1865年にはすでに完成していた。スウィンバーンのブレイク論は、ブレイク作品の分析、詳細なコメンタリー、情熱的な賛美とからなる。たとえば『天国と地獄の結婚』(*The Marriage of Heaven and Hell*, 1793)は、「ブレイク作品中最もっとも偉大な作品である。高貴な詩と霊的な思索という点で18世紀最大の作品である」とやや褒めすぎと思われるが、一方、ブレイク作品を「神話」と位置づけたことは、スウィンバーンの功績であるといえるかも知れない¹²。

↘London: Pennsylvania State UP, 1990) 91を見よ。

¹² Luke, ed., xiv.

本稿にとってもっとも重要なことは、『エルサレム』(*Jerusalem*, 1804) 解説をひととおり終えたところでスウィンバーンは、突然、「その詩作品が、ブレイクとまったく同じかあるいは似ていると思われるひとりの詩人を思い出す。目指すものが巨大で、細部は大胆、ほかの詩人とはまったく似ておらず、自己への態度は一貫しており、外側は奇妙だけれど内側は正気」な詩人としてホイットマンの名前を挙げ、延々4頁近くにもわたって、ブレイクとホイットマンの類似点あるいは共振関係を述べたことである。

The points of contact and sides of likeness between William Blake and Walt Whitman are so many and so grave, as to afford some ground of reason to those who preach the transition of souls or transfusion of spirits. The great American is not a more passionate preacher of sexual or political freedom than the English artist... From the fresh free ground of either workman nothing is excluded that is not exclusive. The words of either strike deep and run wide and soar high. They are both full of faith and passion, competent to love and to loathe, capable of contempt and of worship. Both are spiritual, and both democratic; both by their works recall, even to so untaught and tentative a student as I am, the fragments vouchsafed to us of the Pantheistic poetry of the East.¹³

スウィンバーンはさらに続けて「ふたりの表現や思索に見られる何気ない大胆さ」は、とてもよく似ていると言い、「人を殉教者や預言者にするところの神聖な献身と無償の愛は、ふたりの詩人に顕著である……作品の外見も細部も、つねにそして必然的に一致し重なり合う」、「さーっと通り過ぎる風のような音、星のような輝き、広大な海の上を横切る羽根の広がり」と狂喜、自由を求める断固たる内省的愛、共感の深さと軽蔑の激しさ……、絵画的集中と没我のもつ強烈で絶対確実な力」も共有すると語る¹⁴。

スウィンバーンのホイットマンに対する熱狂的賛美は、やがてホイットマン

13 Swinburne 300-301.

14 Swinburne 301-302.

を裏切るような形で冷えきってしまうものの、ホイットマンとブレイクのエネルギーが共振・共鳴したことをスウィンバーンは感じ取っていた。ふたりの魂のバイブレーションを察知したスウィンバーンの優れた詩的感受性は、次に見るように、コンウェイのさらなる洞察を導くことになる。

コンウェイ「評論」(1868)

スウィンバーンのブレイク論(1868)の書評であるコンウェイの「評論」は、わずか5頁足らずの短いエッセイだが、1860年代英国において、どのような視点からブレイクとホイットマンの「親戚」関係を捉えようとしていたかを伺い知ることのできる貴重な資料である¹⁵。

コンウェイのスウィンバーン書評は、超絶主義者にして政治的リベラリストという立場からのものであることに先ず注意したい。トマス・ペイン(Thomas Paine 1737-1809)¹⁶の優れた伝記作家としての顔をもつコンウェイは、アメリカの奴隷制を激しく非難しアメリカ独立を明確に主張したペインと同時代のブレイクとを比較対照しながら「評論」を展開させる。そのような視点から、コンウェイは、アメリカ独立戦争に霊的解釈を施したブレイク作品『アメリカ』(*America a Prophecy*, 1793)を基にブレイクを超絶主義的デモクラシーの預言者と見なす。コンウェイによれば、ペインとブレイクは、アメリカに対して同じよ

15 Conway については、図1解説、John d'Entremont, *Southern Emancipator: Moncure Conway, the American Years, 1832-1865*; Mary Elizabeth Burtis, *Moncure Conway 1832-1907* (New Jersey: Rutgers UP, 1952)などを参照。South Place Chapelについては、Warren Sylvester Smith, *The London Heretics 1870-1914* (London: Constable, 1967) 104-131.

16 ConwayのPaine観については、Paine伝としては最も初期のものであるConway, *The Life of Thomas Paine* (London: Watts, 1909)を参照。BlakeとConwayについては、Shirley Dent and Jason Whittaker, *Radical Blake: Influence and Afterlife from 1827* (London: Palgrave/Macmillan, 2002) 96-102にも言及あり。

うな夢を持ち同じようなヴィジョンをアメリカに実現させようと似たような「ヴィジョンの政治学」¹⁷を展開したと語る。

ここまで筆をすすめてきたコンウェイは、冒頭で用いた神秘主義は真理の水槽のようなものだという比喻を再び持ち出し、ホイットマンをアメリカにおける「ウィリアム・ブレイクの再登場」だと次のように高らかに宣言する。

This strange fire needed a deep cistern, no doubt. It has burst forth again, however, and now in the large and free genius of Walt Whitman, by the traditional and theological language and form are entirely ignored, and Nature and Life, without regard to lines of good and ill, are everywhere loved and celebrated as the physiognomical expressions of the all-fair unity. On this re-appearance of William Blake in America Mr. Swinburne has touched in the spirit of literary, rather than historical or philosophical criticism.¹⁸

ブレイクは、「人間の胸の内にはあらゆる神々が住む」(“All deities reside in the human breast”)と叫ぶ荒野の預言者であったとコンウェイは語り、『天国と地獄の結婚』からの一節(*The Marriage of Heaven and Hell* 11; E38)をリフレインのように繰り返し引用する¹⁹。この一節にスウェーデンボリの影響がある事は、すでに指摘されている²⁰。コンウェイは、スウィンバーンによるブレイク作品の分析は一貫性のあるものだったと評価し、「道徳的汎神論者」と自己を位置づけるスウィンバーンの立場を肯定し、ブレイクのグノーシス的側面を見事に要約しつつ、スウィンバーンのブレイク論は今日の詩的・哲学的文学にとって

17 Mark Schorer, *William Blake: The Politics of Vision* (New York: Henry Holt, 1946).

18 Conway 218.

19 Blake からの引用は、*The Complete Poetry and Prose*, ed. David V. Erdman with Commentary by Harold Bloom (Berkeley: U of California P, 1982) に依る。E と頁数で表す。

20 W. H. Stevenson, ed., *Blake: the Complete Poems* (1971; 3rd ed. London: Longman, 2007) 117n.

きわめて貴重な成果であると「評論」を締めくくる。

コンウェイの「評論」には、「アメリカ」「自然」「スウェーデンボリ」という言葉が鍵語として何度も出てくる。なかでも、コンウェイが繰り返しスウェーデンボリに言及しているのは注目に値しよう。スウィンバーンは、ブレイクの『天国と地獄の結婚』の解説部分において少しだけスウェーデンボリに言及しているが、それ程突っ込んだ議論を展開したわけではない。しかし、コンウェイはおそらくスウィンバーン以上に、ブレイクにとってのスウェーデンボリの重要性を洞察し、ブレイクがスウェーデンボリを嫌った理由やスウェーデンボリの長所と短所にも繰り返し触れる。ブレイクとホイットマンの共通性に言及する箇所でも、コンウェイは、スウェーデンボリを持ち出す。

スウィンバーンは、ブレイクとホイットマンの共通性について「ブレイクもホイットマンもともに霊的でありともにデモクラティックである」と書いた。「魂の移動や霊の注入」は、ふたりの詩人に共通するとスウィンバーンは述べているが、これは汎神論的思想の特徴でもありスウェーデンボリにもいうまでもなく類似した思想がある。超絶主義思想——「個人一人ひとりには神聖な個性が備わっており、その個人が内面の欲求に忠実に生きて、自己の可能性を実現すれば人類の理想は実現する」——とも通底する²¹。コンウェイは、父親の所有する 50 人から 60 人の奴隷たちも「また初歩的なものではあれ独自のスウェーデンボリ主義と超絶主義を信奉していた」(“their own rudimental Swedenborgianism and Transcendentalism”)²²と語っており、つまりは、スウェーデ

21 渡辺利雄『講義アメリカ文学史 全3巻』(研究社、2007)第1巻、250頁。コンウェイは、Whitman には一見“Oriental literature”のたしなみが無いように見えるが、事実は恐らく異なるだろうと、“Walt Whitman”と題したエッセイの中でも記している。Moncure Conway, “Walt Whitman”, *The Fortnightly Review* xxxv (Oct. 15, 1866): 538 参照。

22 引用箇所を含む原文は以下の通り。“... for these humble and ignorant souls, denied the reading of the Bible, had conceived a symbolism of their own, and burdens of /

ンボリ思想と超絶主義思想とは共存し得るということなのである。スウィンバーンにしてもコンウェイにしても、汎神論、スウェーデンボリ思想、超絶主義という言葉に厳密な定義を与え差異化をはかった上で慎重に用いたわけではない。従って、ここでもこれら3つの思想的・宗教的吟味には立ち入らない。しかしながら、これら3つの思想が、互いに排他的とはならず相互に重なり合い共有する部分があると理解されていたこと、それが「人間の胸の内にはあらゆる神々が住んでいる」というブレイクの言葉に集約されている、と彼らは考えていたことを確認しておきたい。

2. どのタイプのブレイク？

「全米反奴隷制新聞」(National Anti-Slavery Standard)

1868年ロンドンにおけるブレイクとホイットマンの接点が、スウェーデンボリ主義にあったことが明らかとなった。ここでホイットマンが初めて出会ったブレイクは一体「どのタイプのブレイク」であったかを推測してみると、実は、アメリカで最初にブレイク作品が紹介されたのは、「全米反奴隷制新聞」(*National Anti-Slavery Standard*)という週間紙であったという事実が大いに参考になる²³。この新聞は、ボストンに本部を置くアメリカ反奴隷制協会(American Anti-Slavery Society)の機関紙として、1840年6月から1870年4月までニュー・

\prophecy, and had changed the fields on which they toiled into the pavements of the New Jerusalem, glorified with spirits arrayed in white. The cant phrases of the white preachers whom they listened to had become alive to them, and mingled strangely in their speech and hymns; they had, too, their own rudimental *Swedenborgianism and Transcendentalism*" (my italics). See Moncure Conway, *Testimonies concerning Slavery* (2nd ed.; London: Chaplan and Hall, 1865) 4.

23 Andrew M. Stauffer, "The First Known Publication of Blake's Poetry in America", *Notes and Queries* (March 1996): 41-43.

ヨークで発行された。紙名からも明らかなように、反奴隷制度を掲げたこの新聞は、1842年3月と9月にブレイク作品を紹介している。ホイットマンの年譜を見ると、1841年にはニュー・ヨークに戻ってきているので、この週間新聞に掲載されたブレイク詩を読んだ可能性は十分にある。最初に紹介された作品は、「黒人の少年」(“The Little Black Boy”; E9)であった。『無垢の歌』(1789) (『無垢と経験の歌』[*Songs of Innocence and of Experience*], 1794) 所収のこの作品は、アフリカ生まれの黒人の少年が、黒人も白人と同じ肌の色となるような天国を夢見ており、そうすれば白人のイギリスの少年も黒人の自分を好きになってくれるだろうという趣旨の作品である。

ブレイク作品を「全米反奴隷制新聞」紙上で紹介したのは、1841年5月から1843年5月までこの新聞の編集長をつとめたリディア・マライア・チャイルド (Lydia Maria Child) であったといわれる²⁴。チャイルドは、スウェーデンボリに深い関心を抱いた人物で、当時友人のひとりエリス・ローリング (Ellis Loring) に宛てた書簡のなかで、「黒人の少年」を想起させるようなことを伝えていた。つまりチャイルドは、「あるゆるものが変容して白黒が逆転するような天国」というスウェーデンボリの天国観 (つまりは「黒人の少年」の夢) について語っていたという²⁵。実際、この週間紙に頻繁に寄稿していたユニテリアン派の知識人たちは、スウェーデンボリ主義と超絶主義の思想に深い影響を受けていたといわれる。1832年にブレイクの超自然的側面を強調した「ブレイクの想い出」(“Memoirs of William Blake”) が掲載されたのも、おなじくスウェー

24 Stauffer 41-43.

25 Stauffer 43n9. Child に関しては、Carolyn L. Karcher, *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child* (Durham and London: Duke UP, 1994) が最も優れた伝記である。Child と *National Anti-Slavery Standard* に関しては、本書の “*The National Anti-Slavery Standard: Family Newspaper or Factional Organ?*” 267-294; Child と Swedenborg (Swedenborgianism) については、14, 29, 118, 269 他を参照。

デンボリ主義に深い関わりのある、ボストンで発行された『新エルサレム・マガジン』(*The New Jerusalem Magazine*)であった²⁶。さらにこの雑誌も、1842年に初めてブレイク作品のひとつ「仔羊」(“The Lamb”)を掲載した。アンドルー・スタウファー(Andrew Stauffer)は、「1840年代のニュー・イングランドにおいて、政治・哲学・審美学をつなぐネット・ワークとしての反奴隷制度を主張する知的グループの間で、ブレイク作品は読まれていた」と結論づけている²⁷。

ホイットマンがスウェーデンボリに深い関心を抱いていたことは、エマスン(Ralph Waldo Emerson 1803-1882)のスウェーデンボリに関する講演を聴いて感動したと漏らしていることや、1858年6月15日付けブルックリン「デیلی・タイムズ」(*Daily Times*)掲載のホイットマンの文章、「スウェーデンボリとは何ものであったか?」(“Who was Swedenborg?”)にも伺うことができる。このなかでホイットマンは、「スウェーデンボリ信奉者たち——その中にはわが国の指導者たちも何人かいる——は、スウェーデンボリほどアメリカの思想、神学そして文学に顕著な影響力を及ぼしている人物はほかのどんな時代にもなかったと主張している」と述べ、さらに「[スウェーデンボリは]地上に生きている誰よりも、この国の未来の宗教に最も深いそして広い刻印を押すことになるだろう」と書いている²⁸。スウェーデンボリ信奉者たちが始めた雑誌『クリスチャン・スピリチュアリスト』(*The Christian Spiritualist*)の中でも、『草の葉』は、スウェーデンボリの教義を部分的ながら具体的に表現した偉大な作品として好

26 S. Foster Damon, “Some American References to Blake before 1863”, *MLN* (June 1930): 365-370.

27 Stauffer 43.

28 *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman*, ed. Emory Holloway, 2 vols. (London: William Heinemann, 1922) vol. 2, 16-18. Anders Hallengren, “A Hermeneutic Key to the title *Leaves of Grass*”, in *In Search of the Absolute: Essays on Swedenborg and Literature* 45-60.

29 Hallengren 47.

意的に紹介されたことや²⁹、1857年から1858年頃のホイットマンの草稿（“The New Jerusalem”）に、スウェーデンボリが生前余り知られていなかったことを嘆き、彼こそ3000年先を先取りした思想家であるとする言葉が残されていたことなども注目していただろう³⁰。

ブレイクがスウェーデンボリ主義に一時期心酔し大きな影響を受けたことは、すでにブレイク研究の常識となっている。このことは、ブレイクが、スウェーデンボリの著書のうち3冊——『天国と地獄』（*A Treatise concerning Heaven and Hell*, 1784）、『神の愛と神の智恵に関する天使の智恵』（*Wisdom of Angels concerning Divine Love and Divine Wisdom*, 1788）、『神の摂理に関する天使の智恵』（*Wisdom of Angels concerning Divine Providence*, 1790）——に、とくに『神の愛と神の智恵に関する天使の智恵』には夥しい書き込みをしていることにも伺うことができる。先にも触れたようにブレイクは、新エルサレム教会の総会に妻キャサリンと出席したものの、その後はスウェーデンボリに対して批判的な立場を取るようになる。とはいえブレイクのスウェーデンボリへの関心は消えたわけではなく、『ミルトン』（*Milton*, 1804）や『エルサレム』などにはスウェーデンボリからの影響が見え隠れしている。1809年の個展にブレイクは、スウェーデンボリの『真のキリスト教』（*True Christian Religion*, 1781）³¹を題材にした絵画（“Number VIII. The spiritual Preceptor, an experiment Picture”）を1点展示しており、このことは、「聖なる師」（“a divine teacher”）としてのスウェーデンボリへの関心と敬愛の気持ちは生涯変わらなかったことを示している³²。

30 Emory Holloway は Swedenborg からの影響を強調する。Holloway, ed. Vol.2, 16n.

31 正式題名は以下の通り。*True Christian Religion; containing the Universal Theology of the New Church: which was Foretold by the Lord, in Daniel, chap. Vii.5.13,14 and in The Apocalypse, Chap. Xi. 1, 2, 2 vols.*(London: 1781)

32 Edith J. Morley, ed., *Blake, Coleridge, Wordsworth, Lamb, &c., being Selections from the Remains of Henry Crabbe Robinson* (Manchester: Manchester UP, 1932) 5.

こうしてみると、ロセッティやコンウェイ、スウィンバーンらが鋭く見抜いたように、1850年から60年代の英国において、ホイットマンとブレイクの共通項あるいは双方を結ぶ媒介項のひとつは「スウェーデンボリ」であったと改めて強調してよいと思われる。つまりふたりの詩人における「スウェーデンボリ値」の確認こそが、「親戚度」のパロメータとなると言えよう。そこで、双方のスウェーデンボリ値の「質」（レベルではない）が問われることになる。別な言い方をすれば、スウェーデンボリの何がふたりの詩人に訴えたのか。スウェーデンボリの「恵み」とは何であったか。

3. スウェーデンボリ値で測るホイットマンと ブレイクの「親戚度」

ホイットマンとブレイクの「親戚度」を測るパロメータとして、「反奴隷制」、「照応」、「触覚」、「巨人」の4点に絞り、具体的に作品を取り上げて検討してみたい。但し、ブレイクとホイットマンがスウェーデンボリに触れた時期にはおおきなひらきがあり（年齢差は約60歳）、さらに英国とアメリカという地域差も考慮しなくてはならない。ブレイクがスウェーデンボリ思想に出会ったのは、1790年前後である。一方、ホイットマンがスウェーデンボリに触れたのは1840年代以降のことであろうか。

反奴隷制度の言説（Abolition Discourse）

ホイットマンに限らず当時のアメリカ人にとって、奴隷制度が最大の政治的・

33 英国においても奴隷制は多種多様な派生的「言説」を生み出した。まとめて入手可能なものとしては、とりえず Sukhdev Sandhn, David Dabydeen et al., eds., *Slavery, Abolition and Emancipation; Writing in the British Romantic Period* (London: Pickering & Chatto, 1999) 6 vols. をあげておく。

人道的・倫理的問題のひとつであったことは言うまでもない³³。ホイットマンのノートブックに刻まれた次の一節は、ホイットマン詩の主題を端的に物語っている。

I am the poet of slaves, and of the masters of slaves
I am the poet of the body
And I am the poet of the soul
I go with the slaves of the earth equally with the masters
And I will stand between the masters and the slaves,
Entering into both, so that both will understand me alike.³⁴

『草の葉』の詩形式と政治を論じるベッツィ・エアキラ（Betsy Erkkila）によれば、奴隷制をめぐる政治・経済が揺れる当時のアメリカという国家身体と、伝統の打破を目論む『草の葉』の主題や詩形式とはアナロジーの関係にあると指摘する³⁵。

ホイットマンの反奴隷制的イデオロギーは、ブレイク同様、スウェーデンボリの思想によってより強化されたと言えるであろうか。アメリカ反奴隷制協会の機関紙であった「全米反奴隷制新聞」紙の編集者の多くが、先にも触れたように、チャイルドをはじめとしてユニテリアン派の知的グループに属し、超絶主義的思想を持つスウェーデンボリ主義者であったことを考慮するなら³⁶、ホイットマンの反奴隷制思想の背景にも何らかのスウェーデンボリからの影響力

34 UPP II. 69, quoted in Betsy Erkkila, *Whitman the Political Poet* (Oxford: Oxford UP, 1989) 50, especially chapter 3. “The Poet of Slaves and the Masters of Slaves” 44-67. 奴隷売買は、“a disgrace and blot on the character of our Republic, and on our boasted humanity”であるとWhitmanは、“Slavers and the Slave Trade”の中で書いている。Brooklyn *Daily Eagle*, March 18, 1846, quoted in ed. Holloway, Vol. 2, 106 参照。

35 Erkkila 50.

36 Stauffer 43.

はあったと考えてもあながち的はずれとは言えないだろう。エアキラによれば、1840 年代後半から 1850 年代にかけてホイットマンは、講演（“lessons”と呼んでいた）のテーマをもっぱら「奴隷制」とし、当時のメモには「反奴隷制集会（Anti Slavery Meeting）に集まった聴衆に向けて講演する」と何度も記されていたという³⁷。先にも触れたように、コンウェイが、父親の所有する奴隷たちについて「彼らもまた初歩的なものではあれ、独自のスウェーデンボリ主義と超絶主義を信奉していた」と証言していたこともまた、反奴隷制とスウェーデンボリの結びつきをより鮮明にするだろう。

83 歳のスウェーデンボリが最後に英国にやって来たのは 1771 年、その翌年にはロンドンで亡くなっている。1757 年に最後の審判を見たスウェーデンボリは書いているが、この年は奇しくもブレイク誕生の年でもあった。英国におけるスウェーデンボリの影響力は根強いものがあり、1789 年には、ロンドンのグレイト・イーストチープ（Great Eastcheap）に設立された新エルサレム教会（New Jerusalem Church, 1786 年創設）の総会が開催された³⁸。

スウェーデンボリ主義者たちが奴隷制度に強く反対していたことは、ブレイクとホイットマンの共通点を探るうえできわめて重要である。スウェーデンボリは、アフリカの奥地に住む人々は神から直接靈感を注がれた人たちであると説いた。その結果、1779 年、ノルヒェーピング（Norrköping）（ノルチョーピング）に、スウェーデンボリ主義者たちによる奴隷制度廃止論協会が設立された。ノルヒェーピング（ノルチョーピング）は、スウェーデン南東部ストックホルムの南西、バルト海の入江の奥にある人口 12 万人の港湾都市である。そして

37 Erkkila 61.

38 New Jerusalem Church の盛衰については、Robert Hindmarsh, *Rise and Progress of the New Jerusalem Church in England, America and Other Parts*, ed. Edward Madely (London: 1861) を参照。

この協会の創設者のひとり、スウェーデン生まれのカール・バーナード・ワドストロム（Carl Bernhard Wadström 1746-1799）³⁹ は、1788 年にロンドンに渡り、上で触れた 1789 年の新エルサレム教会の総会に出席した。ブレイク夫妻もこの総会に出席したことはよく知られている。ワドストロムは、さらにアフリカの西海岸にあるシエラレオネ（Sierra Leone）にスウェーデンボリ教義のひとつである「夫婦愛」（“conjugal love”）に基づいた白人・黒人による自由共同体を作ろうという計画の中心人物であった⁴⁰。

アフリカ人は最も神聖な存在であるというスウェーデンボリの教えは、ブレイクの『アメリカ』において、「なんじ（オーク [Orc]）は、アフリカの暗黒地にすむ神の似姿だ」（2:8; E52）に端的に現れている。先に触れた「黒人の少年」は、もっとも完璧な「スウェーデンボリ詩」（“Swedenborgian poem”）とも呼ばれている⁴¹。またブレイク作品『セルの書』（*The Book of Thel*, 1789; E3-6）は、上に触れたアフリカの西海岸に白人・黒人による自由共同体を作ろうという計画に、「ノン」を突きつけた作品であるという解釈がある。その解釈によれば、『セルの書』の女主人公セルは、ユリや土くれや雲が勧める人生を受け入れることを拒否するのであるが、セルの「拒否」は、つまりはスウェーデンボリの自由共同体計画へのひいては彼の「夫婦愛」の原理への「ノン」に他ならない⁴²。

39 Carl Bernhard Wadström に関しては、Robert Rix, *William Blake and the Cultures of Radical Christianity* (Aldershot, England: Ashgate, 2007) 91-92, 94-95, 96-98.

40 Swedenborg は、“conjugal love”ではなく“conjugal love”とも書き彼独特の意味合いを込めて使う。後者に関して *OED* は Swedenborg の用例のみを引用。

41 Kathleen Raine, “The Swedenborgian Songs”, *Blake and Swedenborg: Opposition Is True Friendship* 73.

42 David Worrall, “Thel in Africa: William Blake and the Post-colonial, Post-Swedenborgian Female Subject”, *The Reception of Blake in the Orient*, eds. Steve Clark and Masashi Suzuki (London: Continuum, 2006) 17-28. Blake と Swedenborg (Swedenborgianism) に関する文献は枚挙に暇がない。最近のものとしては、注 8 ↗

「照応」(correspondence)

ホイットマンとブレイクに共通する要素は、西欧文化に連綿と続いている「霊肉」「心身」二元論つまり「靈魂」と「肉体」の上下関係を切り崩し、双方の価値を等しいかあるいは逆転させる姿勢、もっといえば「肉体」を「靈魂」の上位に置こうとする姿勢である。このようないわば「肉体の復権」とでもいえる視点は、自然界（肉体）と霊界（靈魂）は、異なっているが「ひとつ」であること、二つの世界は不連続ではあるが「ひとつ」であること、そして自然界のこちら側からそれに対応する霊界の向こう側を常に意識し続けよ、とするスウェーデンボリの「照応」理論によるところが大きいと思われる⁴³。このことを裏付けるような具体的作品例は、ホイットマンにもブレイクにも枚挙に暇がないほどである。先ず、ホイットマンの場合はどうだろうか。

And if the body were not the soul, what is the soul?

(“I sing the body electric”, 8)⁴⁴

“Behold, the body includes and is the meaning, the main concern, and includes and is the soul.” (*Starting from Paumanok*, 13)

ブレイクの場合はどうだろうか。

ㄨや注 39 で挙げたものの他に、やや古いが信頼できるものとして Morton D. Paley, “‘A New Heaven is Begun’: William Blake and Swedenborgianism”, *Blake: An Illustrated Quarterly*, 13/2 (1979): 64-90.

43 “correspondences” 理論が Child に与えた影響については、Karcher 14 他。

44 本稿における Whitman からの引用は、Jerome Loving, ed., *Leaves of Grass* (Oxford: Oxford UP, 1990) に依る。テキストについて編者は次の様に記している。
“The text for *Leaves of Grass* reprinted here is the so-called Death-bed edition published by David McKay, Publisher, dated 1891-92 on the title-page.”

Man has no body distinct from his soul, for that called
Body is a portion of soul discerned by the five senses,
chief inlets of soul in this age.
(*Marriage of Heaven and Hell*, 4:8-10; E34)

ホイットマンとブレイクの作品をスウェーデンボリ『天国と地獄』の一節と比較してみよう。

First, then, it shall be stated what correspondence is. The whole natural world corresponds to the spiritual world, not only the natural world in general, but also in particular. Whatever, therefore, is the natural world exists from the spiritual, is said to be its correspondent. It must be understood that the natural world exists and subsists from the spiritual world, just as an effect exists from its efficient cause.⁴⁵

スウェーデンボリは『神の愛と神の知恵に関する天使の智恵』に、「自然界と霊界というふたつの世界は、非常に異なっていて双方の間に共通するものは何もないのだが、それらは交流し合い、そう、照応によって結び合うように造られている」と述べている⁴⁶。『神の愛と神の知恵に関する天使の智恵』のこの一節に、ブレイクは大いなる共感を示す。ふたつの世界がひとつであることを認識するのが、ブレイクのいう「詩の霊」(“Poetic Genius”)つまり想像力の働きである。ブレイクは、従って、スウェーデンボリがふたつの世界の違いを強調し始めると、途端に不機嫌になる。たとえば、スウェーデンボリが、太陽には、霊界の「生きた太陽」と自然界の「死んだ太陽」のふたつがあるとして「死んだ太陽そのものは主の力によって生きた太陽から造られた」(No. 164)と言うと、ブレイクは「生命が死を創造することなどどうしてできようか」

45 *Heaven and Hell* No. 89.

46 引用は、*Angelic Wisdom concerning the Divine Love and concerning the Divine Wisdom*, tr. J. J. Garth Wilkinson (London: Swedenborg Society, 1890) No. 83 に依る。

(E605) と反論するのである。「黒人の少年」に描かれた太陽の光も熱（暑さ）も、スウェーデンボリの「照応」理論によって説明が可能だ。

「触覚」(touch) と性の政治学

ブレイクとホイットマンに共通する重要なスウェーデンボリの「恵み」あるいはスウェーデンボリの遺産と思われるもののひとつに「触覚」がある。スウェーデンボリのみならず、ブレイクやホイットマンにとっても、触覚は五感のなかでも非常に重要な感覚であったことを確認しておきたい。

スウェーデンボリは、「触覚」が視覚や聴覚以上に「ヴィジョン」の状態に入る際に重要な役割を果たしていると述べ、その触覚の働きを「実に驚くべきことには」(“what is wonderful”) と繰り返し語る⁴⁷。さらにスウェーデンボリは、「触覚」を生殖行為と結びつけて五感のなかでも「すべてにまさる」と繰り返し述べる。

Conjugal delight, which is a purer and more exquisite delight of touch, surpasses all the rest on account of its use, which is the procreation of the human race, and thence of the angels of heaven.

ホイットマンもまた、『草の葉』28節で「触覚」に格別な意味を与えている。カール・シャピロ (Karl Shapiro) は、28節を「『草の葉』のなかでもっとも偉大な瞬間のひとつ」と言い、J. E. ミラー (J. E. Miller) によれば、「(ここで詩人は) 新しいアイデンティティを獲得する。五感ではなく五感を悪しきものとみる幻想を浄化することによって得られたアイデンティティ」を、この瞬間にホイットマンは獲得したのだという。28節は、「5節で語られた肉体と魂の合体

47 *Heaven and Hell* No. 402. この半覚半醒の状態は、Blake 作品 *Milton* にも取り入れられている。

の後にやって来たものであり、49 節におけるわたし (the I) とコスモス／大宇宙 (kosmos) との合体を予想する」と、エドウィン・ハヴィランド・ミラー (Edwin Haviland Miller) は指摘する⁴⁸。5 節はホロウェイによれば『草の葉』のなかでも最も「スウェーデンボリの」と呼ばれる箇所だ⁴⁹。

28

Is this then a touch? Quivering me to a new identity,
 Flames and ether making a rush for my veins,
 Treacherous tip of me reaching and crowding to help them,
 My flesh and blood playing out lightning to strike what
 is hardly different from myself,
 On all sides prurient provokers stiffening my limbs,
 Straining the udder of my heart for its withheld drip,
 Behaving licentious toward me, taking no denial,
 Depriving me of my best as for a purpose,
 Unbuttoning my clothes, holding me by the bare waist,
 Deluding my confusion with the calm of the sunlight and pasture-fields,
Immodestly sliding the fellow-senses away,
 They bribed to swap off with touch and go and graze at the edges of me,
 No consideration, no regard for my draining strength or my anger,
 Fetching the rest of the herd around to enjoy them a while,
 Then all come to the headland to witness and worry me.
 The sentries desert every other part of me,
 They have left me helpless to a red marauder,
 They all come to the headland to witness and assist against me.

. . .

You villain touch! What are you doing? My breath is tight in its throat,

48 Edwin Haviland Miller, *Walt Whitman's "Song of Myself": A Mosaic of Interpretations* (Iowa: U of Iowa P, 1989) 101.

49 Holloway, ed. 16.

Unclench your floodgates, you are too much for me. (下線筆者)

28 節での「触覚」(“touch”)が、すぐれて性的な意味合いを持つことは、一読して明らかでありまた多くの研究者の指摘するところでもある。「残虐非道な略奪者」(“a red marauder”)としての「触覚」による襲撃。『草の葉』のなかで維持されてきたホイットマンのペルソナがそのバランスを失する瞬間である。「裏切者のぼくの先端」(“Treacherous tip of me”)の反乱によって「ぼく」の身体は硬直し、肉体と魂のバランスを失う。「触覚」=「残虐非道な略奪者」が身体の秩序を突き崩すとき、28 節全体は俄然政治的ニュアンスを帯び始める⁵⁰。

ブレイクにとっても「触覚」はきわめて重要な役割を与えられている。たとえば、『ヨーロッパ』(*Europe a Prophecy*, 1794)冒頭で、ブレイクは人間を五感という洞窟のなかに囚われて身動きできない存在(“the cavern'd Man”; E60)として描く。この洞窟には5つの窓=五感があり、人は「空気を吸い」(臭覚)、「天球の音楽を聴き」(聴覚)、窓に絡みつく「ブドウを受け取り」(味覚)そして「永遠界のわずかな部分」を見る(視覚)ことができる。しかし最後5つ目の窓つまり「触覚」の力で人はその洞窟の外に好きなときに出て行くことができる(“Thro' one, himself pass out what time he please”, iii: 5; E60)と書いている。墮落した人間は五感に閉じ込められているというのが、ブレイクの基本的な考えでありそこから脱出することができるのは5番目の——おそらく西欧文化において、五感の中でもっとも低い位置に置かれた——感覚である「触覚」

50 上記引用箇所の“worry”に注目した Erkkila は、この言葉は個人的であると同時に政治的な意味合いをもつと指摘する(Erkkila 105)。つまりここは、デモクラシーの危機と触覚によって混乱させられた身体というふたつの事柄に関わる一節ということになる。Whitman はしかし、この身体および国家身体の危機を、「触覚」と宇宙の再生エネルギーを直結させることで乗りきろうとする。尚、Whitman 詩の訳文は、酒本雅之訳『草の葉』岩波文庫・上(岩波書店、1998)を借用した。

の力に依るとブレイクは言う。

触覚は肉体の特定部所に限定されず肉体全体を覆っていることから、スウェーデンボリにおけると同様に、ブレイクにとっても触覚はサーマス（Tharmas）の属性として五感すべてを代表する。そのサーマスは、「五感によって認識される魂の一部としての」「肉体」（“that calld Body is a portion of Soul discerned by the five Senses”, *MHH* 4; E34）とその「活力」（“Energy is the only life, and is from the Body”, *MHH* 4; E34）をも表象することから、性的活力の源である「腰」に結びつき、さらに触覚と同一視されることになる。

スウェーデンボリでは、ヴィジョンに包まれた状態（肉体から魂が出ていく瞬間）が啓示されるときに触覚の果たす役割が格別重要なものとして描かれていたし、また、生殖にとっても本質的な感覚であった。同じようにブレイクにあって触覚は、墮落した人間の回復／復活には欠くことのできない五感のひとつとして特別の意味が付与され位置付けされていることは注目に値するであろう。さらに触覚は、性と結びつき性的恍惚感を人にもたらしそうすることで人を永遠界へと導く力を持つとされる。ブレイクにあって触覚は、他の4つの感覚のように「死んで」ではないけれど「呪われた」感覚なのである。

「巨人」（“Grand Man”）, 「大宇宙」（“Kosmos”）, 「巨人アルビオン」（“Giant Albion”）

ロセッティ編『ホイットマン撰集』には、エピグラフのひとつとして次のようなスウェーデンボリからの引用が掲げられている。ロセッティのホイットマン観を伺うことのできる興味深い一節である。

That angels are human forms, or men, I have seen a thousand times. I have also frequently told them that men in the Christian world are in such gross ignorance respecting Angels and Spirits as to suppose them to be minds without a form, or mere thoughts, of which they have no other idea than as something ethereal possessing a vital principle.

To the first or ultimate heaven also correspond the forms of man's body, called its members, organs, and viscera. Thus the corporeal part of man is that in which heaven ultimately closes, and upon which, as on its base, it rests.

ロセッティが引いた一節は、天界が「巨人」の形姿をとり人間の各部位はその巨人のそれらとの照応関係にあるという、スウェーデンボリ理論を述べた箇所である。スウェーデンボリはさらに、「すべての天は……人間の形姿をしており、巨人そして神的人間（the Grand and Divine Man）と称される」、「人間は巨人の姿をした最小の天界でありまた世界であるから、彼の中には霊界も自然界も存在している」、「全天界は一人の人間を表象しその形姿は人間であり、それゆえそれは巨人であることはすでに示した。つまり天界を構成する天使の社会は、人間の肢体、器官、内臓のように配列されている」などとも書いている⁵¹。

上記エピグラフには、当時スウェーデンボリに夢中になっていたロセッティが、ホイットマン詩に嗅ぎ取ったホイットマン詩の本質とでもいうべきものが現れているのではないかと思われてならない。スウェーデンボリの「巨人」は、霊界宇宙のすべてを包摂した聖なる存在であることから、ホイットマンの「コスモス／大宇宙」やブレイクの「巨人アルビオン」を直ちに想起させる。ホイットマンは、「大宇宙」（“KOSMOS”）をこう歌っている——「（整然たる大宇宙とは）多様を裡に含みつつ、それみずからは「自然」であり、／……信じる者も信じない者も裡に収めて、しかも何にもまして堂々たる愛の持ち主、／……太陽と月をそなえたわたしたちの地球ばかりか、それぞれにおのれの太陽と月をそなえたほかの地球たちまで信じる者、／男であれ女であれ、一日のためではなくてすべての時のためにおのれ自身の家を建てつつ、さまざまな種族、時代、日

51 *Heaven and Hell* Nos. 59, 90 94.

付、世代が、／過去が、未来が、その家のなかに、宇宙さながら分かちがたく、ともに住むさまを見る者のこと」。ホイットマンの「コスモス／大宇宙」は、要するに、全宇宙、過去・現在・未来、人種などの他に、物質的なものであれ知的なものであれ、あらゆるものを包含し得る「巨人」のことであろう。“includes”, “and”, “all”, “contain”, “not only but also” 等が多用されていることも、そのことを物語っている。言い換えれば、スウェーデンボリの「巨人」としての「霊界」とホイットマンの「コスモス＝巨人」としての「全世界＝現実」とは、常に／既に相互参照の関係にあったということだろう。それが「照応」の理論というものだ。

ブレイクの「巨人アルビオン」(“Giant Albion”, *Jerusalem* 27; E171) にも、スウェーデンボリの「巨人」思想からの影響は明らかだ。スウェーデンボリの「神的人間」などは、ブレイクの「聖なる人間の姿」(“Human Form Divine”, *Songs of Experience*, “A Divine Image”; E32) に直接つながるコンセプトのように思える。ブレイク神話を構成する重要人物のひとりであるブレイクのアルビオンは、主として後期預言書と総称される作品群に登場する神話的人物であり、とくにブレイク最後の大作『エルサレム』では中心的役割を果たす。アルビオンは、われわれ個々の人間でありつつ人類全体を表象し、さらには宇宙や全世界の森羅万象を含むものでもある。流出霊と称されるアルビオンの妻「エルサレム」は、新約聖書「ヨハネの黙示録」に登場する「花嫁」にして神の聖なる都市であることから、エルサレムと合体するに至ってアルビオンは聖書世界をも包含する存在となる。

4. ブレイクの墓に眠るホイットマン

こうしてスウェーデンボリを媒介としたホイットマンとブレイクふたりの詩人の「親戚」ぶりを考察してきて、ようやくふたりの詩人を比較できる地点に到達した気がする。本格的な論考は別の機会に譲るとして、もう少し双方の共

通点を考えてみたい⁵²。たとえば、ふたりの詩人の「テキスト」の肌触り。彼らのテキストはともに「生きて」いる——あらゆるものが詰め込まれたホイットマン作品『草の葉』は、それ自体絶えず分裂・増殖を繰り返す得体の知れない生きもののように思える。ホイットマンのテキストが、17-18 世紀英国顕微鏡文化の話題を独占した「ポリープ」(polyp)だとすれば、ブレイクのテキストは、グノーシス的強度の磁場に支えられた大小無数の渦巻きからなる「運動体」である⁵³。ポリープとは「多足」の意であり、この微生物は、幾つに分断してもやがて頭が生まれ尻尾が出てきていつのまにかひとつの生物になるという。伸縮自在にして自分の身体の二倍も三倍もある虫をも平気で飲み込むことのできる「饕餮な生物」(“voracious Animals”)ともいわれるポリープは⁵⁴、呼吸するホイットマン・テキストそのものという印象を持つ。他方、運動体として

52 Whitman と Blake を扱った論文を幾つか読んでみて、その比較のポイントがずれているという印象を持つ。Blake 研究の立場から見れば、それぞれの論者の Blake 理解が浅いかまたは的外れである場合が多い(逆もまた真なりであって、Whitman に関して同様の危険性が本論にもあるだろう)。双方を比較する必然性が感じられないと、論文としては読むに足りないものになってしまうような気がする。具体的論文としては、Martin Bidney, “Structure of Perception in Blake and Whitman: Creative Contraries, Cosmic Body, Fourfold Vision” (*ESQ* 28[1982]: 36-47); Donald Pease, “Blake, Crane, Whitman, and Modernism: A Poetics of Pure Possibility” (*PMLA* 96. 1 [January 1981]: 64-85) 他。

53 Whitman テキストについては、堀内正規、「エマソンの “Self” とホイットマンの “Myself”」および、梶原照子、「身体的な言説——Whitman から Li-Young Lee へ」(『第 80 回大会 Proceedings』164-166 頁; 161-163 頁)を参照。堀内のいう三層からなる Whitman の「自己」とくに〈ハイパー身体〉観は興味深い。Blake との決定的違いと思われるのは、Blake の「自我」は「自我滅却」(self-annihilation)の対象にこそなれ、Whitman のように肥大化することはないし巨人 Albion と同一視されることもない。*Jerusalem* 37[41]の画面中央に刻まれた巨人 Albion の足下で、巻き紙に腰をおろしペンを持つ Blake 自身の小さな姿がそのことをよく伝えている。

54 Henry Baker, *The Microscope Made Easy* (London, 1769) 97-99.



図4 ホイットマンの墓石

Whitman 自身による墓のスケッチ (1890)。

Grace Gilchristによれば, “His monument, a huge stone banked against a hill, a design he himself chose from Blake’s fine engraving of Death’s Door.” (“Chats with Walt Whitman” 212)



図5 ブレイクの《死の扉》(Blake’s “Death’s Door”). Blake 画, L. Schiavonetti 刻. 1808.

Robert Blair (1699-1746) の『墓』(The Grave, 1743) に Blake が付した挿絵 12 点のなかの 1 点。墓に入る老人と復活した若者。肉体と魂、死と再生をモチーフとする。この構図は Blake のお気に入りであり幾度となく描いている。

のブレイク・テキストは、《エゼキエルの車輪》(*Ezekiel's Wheels*, 1805) にとてもよく似ている。ブレイク描く旧約の偉大な預言者による神のヴィジョン(「エゼキエル書」1章)は、エゼキエルがシバー河畔で見た「四つの生きもの」であり、それぞれが「四つの顔」をもつ「人間の姿」をして猛烈な渦巻きに包まれている。ブレイクのテキストを読むとは、危険を顧みず捨て身でこの人間と渦巻きが融合した運動体の直中に飛び込むようなものだ。

ホイットマンは、リチャード・モーリス・バック (Richard Maurice Buck) 宛書簡 (1890年9月29日付) のなかで、自らの墓石 (図4) の下絵について言及している⁵⁵。その下絵については、同じくバック宛書簡 (1890年7月23日付) で、それは「ブレイクの『死』」(“Blake’s ‘Death’”) から取ったと明記している⁵⁶。ホイットマンが言及したのは、《死の扉》(“Death’s Door”, 1808; 図5) と題され墓に入る老人と復活した若者を描いたブレイクお気に入りの構図だ(『エルサレム』口絵はその代表的作品のひとつ)。グレイス・ギルクリストも「ウォルト・ホイットマンとの語らい」を締め括る最後の段落で、「[ホイットマンは] 彼の墓石の素描を、ブレイクの死の扉の素晴らしい銅版画から選んだ」と書いている⁵⁷。ホイットマンは、ブレイクが用意した墓に眠る準備をしていたのではないかと夢想したくなる。「死」の入り口としての墓、しかし逆説めくが、その墓の彼方にあるのは「生」である。死と再生は、実は幾度となく「死んだ」と語るブレイクとホイットマンにお馴染みのモチーフのひとつであった。「確かにわたし自身今まで1万回も死んだ」(“No doubt I have died myself ten thousand times before”, *Leaves of Grass* 49) と語るホイットマンに対して、ブレイクはまる

55 書簡からの引用は、*Walt Whitman: The Correspondence V: 1890–1892*, in Edwin Haviland Miller, ed., *The Collected Writings of Walt Whitman* (New York: New York UP, 1969) に依る。

56 Whitman 詩における「死」については、田中礼『ウォルト・ホイットマンの世界』(南雲堂、2005) 103–123 頁参照。

57 Grace Gilchrist 212.

でこの返答を予期していたかのように、「1757 年 11 月 28 日 ロンドンに生まれ、以後何度も死んだ」(“Born 28 Novr 1757 in London & has died several times since”, “Blake’s Autograph in the Album of William Upcott”; E698) と書いていた。ここにもまた、スウェーデンボリの影が濃厚に漂っているような気がしてならない。

